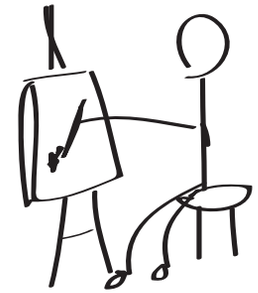
「作者直筆メモ」の存在を知らずに 鑑賞者へ
コミュニケーションとして伝わったこと

※「具体的にはよくわからない。
しかし、自律的藝術作品
だから何か意味があるらしい。
車を描いた絵のように思える 」

コミュニケーション

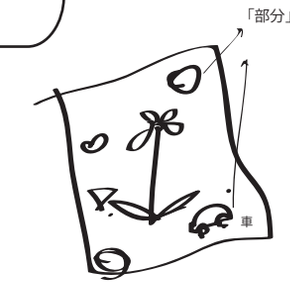


※「花が綺麗だという気持ちを
私は (※狭義の) 作者の意図として
この 絵画『 花 』に托すものである 」

(上記のような 作者の意図が示された
作者直筆メモが存在する
=「 作者の現実の意図」p.96)

時空を超えた不特定の「鑑賞者」
ex) 2019 年の東京の美術批評家

藝術家・画家
ex) 1900 年頃 のパリの画家



※ 絵画「花」

その後、「作者のメモ」の存在が発見される。

※「作者直筆メモによれば 、作者として『花が綺麗だ』という意図があるらしい。
しかしながら、この絵画を 花の絵と 解釈するよりも、
車を描いた絵と解釈したほうが、作品全体の有機的構成 (「高い関与度」p.96)
をうまく 説明できると私 (鑑賞者) は思う。だから作者の現実の意図 を
捨てようと思う 」(c.f . p.96 , 25 段落目)

この論文の結論

「 受け手は、自らの解釈した個別的意図 (※これは車を描こうとした絵) が
現実の作者の個別的意図と異なっていることを知ってもなお、自らの解釈
した個別的意図がやはり作者の個別的意図であると信じ続けるのである。
、、、、、作者自身の意識に上っていないという限りにおいて、われわれは
それを無意識の意図と呼ぶことができるかもしれない 」(p.97, 27 段落)

この論文が明らかにしようとしたことの結論。
「作品として聴き手に呈示される限りにおいて、
一つの特殊なあり方」(p. 84)

でも、このような解釈は、鑑賞者の個別的意図の 解釈が
「作者の個別的意図と全くかかわりなくそうなっている」とみなすことになる。
もしそうならば、〈 個別的意図の存在を前提として一般的意図が成立する〉と考える渡辺としては、
現前の絵の有機的統一は偶然生じていることになる。つまり、鑑賞者が作者による
一般的意図の存在を疑わしく思っていることにつながる。
このように、もし一般的意図の存在の土台が崩れるならば、それはすでに「作品」ではなく、
グライスのいう「自然的意味」(p. 85) をもつような、美しい「自然の事物をみている場合と何ら変わりない」
(p. 96, 26 段目)。したがって、それは「芸術作品」のコミュニケーションとは言えない仕組みとなってしまう。
これは問題だ。

現実には作品は作品でありつづける。
画家の作品は鑑賞者にとって決して物にはならない。
ここに、どのようなコミュニケーションの
「一つの特殊なあり方」(p. 84) がみられるのか ?